「板橋文庫」について

板 橋 重 夫

この度、永井義雄教授の御斡旋で貴学付属図書館に私の蔵書の一部を寄贈させて戴くことになった。また特別の御配慮によって、これらを個人名を冠した文庫として保存して下さることに深く感謝申し上げたい。これらの本は私の半世紀余の研究生活の中で購入した本の内から主として宗教思想に関係するrare bookを選ばして戴いた。rare bookとは何か。しばしばカタログを送ってくるイギリスの古本屋の主人がカタログの裏表紙に書いたエッセイに、扱う古本が次第に数すくなくなってきたことを嘆きながら、「rare bookとは少なくとも19世紀半ば以前の本をいう」と書いていたのが印象に残り、いつの間にかこれが私の基準ともなっている。

rare bookが直ちに貴重本ということではない。研究者にとって或る本が貴重本であるかどうかは、自分の研究にとってどの程度役立つかによって決まってくる。したがって時にはゼロックス・コピーやマイクロ・フィルム、一編の抜き刷りが一冊の本よりも貴重になる場合がある。しかし歴史家にとって自分が専攻している時代に出版された本を手にした時、ゼロックス・コピーやマイクロ・フィルムといった無機質なものと違い、自ずとその時代に我が身が引き込まれ、さまざまな感興と共に思索することができるのである。古書にはこうした魔力があり、これが時に物神性を生み出す。また本が伝える知識や思想の重要性とは別に、特装本とか限定本、例えばケルムスコット版のような本自体が芸術作品であるようなものがある。一度こうした本を手にすると、愛書家であればなんとか我が物にしたい欲望に駆られる。しかし財力乏しい研究者はひたすら禁欲するのみであろう。幸いに私が求めている宗教書は文学書と違って豪華な装丁の本は少ない。装丁は堅牢であれば十分満足すべきであり、たとえ表紙が千切れていようと、背表紙が割れていようと、タイトル・ページとテキストが完全であれば研究者にとっては貴重本なのである。また愛書家は初版本を珍重する。したがって初版本は2版、3版よりはるかに高い値で取り引きされている。初版以下各版を収集し校合することは或る思想家の思想的発展、転化を明らかにするうえで必要不可欠な作業である。しかし二十数版を重ねた或る宗教家の全集をすべて集めることは無駄に近い事であろう。もし2版が改訂・増補版であれば、何れか一冊を選択することになれば私は躊躇することなく２版を選ぶであろう。人間には多少とも蒐集癖があり希少なるものに価値を求める。印刷ミスの切手にべらぼうな値段が付けられたりする。本の場合で言うならば例の『姦淫聖書』がそれであろう。希少であることのみに価値をもとめ、同じ本を所有していた友人を殺害しその本を焼却した「ビブリオ・マニヤ」が居たことが知られている。これは正に狂気の沙汰と言わざるをえぬが、本に対するそれなりの執着心がないと研究者にはなれぬであろう。

ところで何故私がこうした宗教書の類を集め始めたのかを語らねばならない。詳しく語ることは私の紆余曲折した研究の軌跡を辿ることになり、紙幅から言っても場所柄から言っても当を得ない。手短に言えば、イギリス革命以降の市民社会の日常的秩序＝社会倫理の形成に宗教的理念がどれ程の影響を与えたかを検証することを出発点としている。そのために教区牧師が説教壇から語る国教会の教え、非国教徒の様々なセクトの集会で説かれる教えが、革命後の時代にどのような知的、精神的雰囲気を生み出したか。そしてそのような形成された西欧的価値理念がどれ程の普遍性

をもち得るのかを私なりに検討することであった。しかしこうした問題意識は私の学生時代に流行ったウェーバーやトレルチの影響から一歩も出ていないことを反省したい。ただそれをもっと具体的な史料に即して検討しようと試みたのである。いずれにしろ上記の如き問題意識から本を漁ったので、学説史に名を残す大思想家の著作より、名もなき田舎牧師の説教集とか迫害された非国教会派の牧師のパンフレットなどに目を向けた。今日では状況が変わって来たが、こうした類の本は大きな古書店のカタログではお目にかかれず、地方の店舗なしで通信販売をしているような古本屋から偶然手に入るといった場合がほとんどであった。どのような本やパンフレットがあるか判らぬ状態では本屋に注文を出す訳にもいかず、ただ手に入るカタログを丹念にみて探すという能率の悪いやり方で集めざるを得なかった。最近は古書店のカタログにも“ Church ”とか“ Religion ”といった項目が立てられ可成の本がリストされるようになったが、これはイギリス国内においても70年代後半以降王政復古後の社会と宗教を研究する学徒が増えたことによるのであろう。おかげで本の値段は吊り上がり、面白そうなタイトルのパンフレットは１ページあたり１ポンドもするようになっている。私費で購入するとなるとあまり高い値段の本は買いびかえることになる。また古本は一点かぎりが多いから注文しても手に入るとは限らない。10数点の本を注文して１冊も購入できなかったこともある。私が30余年にわたって収集したこれらの書籍は一定の意図で収集されたが、ありふれた本も混じっており、体系的ではない。研究者としてはリプリントやコピーでこの欠けたところを補わなければならない。私はリプリントやコピーで手に入る本は古本で購入することを心して避けた。ということは私がこの度寄贈した本はリプリントされる可能性が極めて少ないもので、一度散逸すればそのまま埋もれ兼ねず、再び集めることが困難という意味で貴重な叢書となろう。安住の地を得たことで本も安堵していよう。

寄贈した本の目録に初学者のための若干の解説を記した。極めて不十分なものである。特に17世紀末に設立された『キリスト教知識普及協会』（Ｓ.Ｐ.Ｃ.Ｋ.）のパンフレットのうち著者、発行年が明らかにできなかったものが数点ある。他の発行年が明記されたパンフレットと体裁、紙質が似ているので略同年代に出版されたものと推測できるが確実ではない。無署名なのは協会の意見を代表したものなのかもしれぬが、これも推測の域を出ない。その他無署名で出版された本が数冊あるが明らかにされている限り著者名を［　］内に記しておいた。研究者泣かせの本は、元の所有者の都合で数冊の発行年代が違うパンフレットや、あるいは同一主題ではあるが異なった著者のパンフレットを一冊に製本して適当なタイトルを付けた本である。寄贈した本のなかにこうした本が何点かあるので注意されたい。これとは逆に古本屋が何人かの著者の論集をばらし、同一主題のパンフレットを集めてセットにする場合もある。『バンゴール論争』のパンフレットがそれで、これだけ集められたものは大変貴重である。

（いたばし　しげお／歴史学者）